『聞き書き集』⑪

平成30年1月発行

荻野榮子さん

（おぎの　えいこ）

昭和8年（１９３３年）1月１５日生　８５歳

～安地（あんち）ママの奮闘記～

喜茂別町教育委員会

「聞き書き」とは？

◇「聞き書き」とは、人から聞いた通りに書き取った記録のことです。

◇「聞き手」が「話し手」の方のお宅などにおじゃまして、お話をボイスレコーダーに録音します。

◇寄稿文と録音からできるだけお話しされた内容や口調を生かして、話し言葉で文章にまとめます。

◇それを本人に、確認や修正をしてもらいます。

◇「聞き手」の感想や批評は一切加えていません。

⇩

◎その人の経験や努力から、生きる知恵を学んだり、自分のこれからの人生に活かしたりすることができるかもしれません。

◎その人の人生を知ることにより、理解が深まり、支え合うことの大切さや、人と交流することの楽しさを伝えてくれるかもしれません。

―　生まれは倶知安町です

　私は、昭和８年１月１５日に倶知安町で生まれました。旧姓は殿川で、実家は倶知安で農業をしていました。
そのころは、水田が多くて、うちも米をつくっていたよ。水田がもう１町、１町じゃない５町ぐらいあったんですね。水田、倶知安でも一番多いくらいつくっていたね。
　倶知安の小学校（※尋常小学校①）の時は、とっても人数が多くて、同じ学年が３クラスあったんだけど、１クラス７０人を超えていたね。あんまり人数が多かったからクラスの中で男子組、女子組に分かれていたもの。
そしてクラスの写真を撮るときは、写真屋さんが「もっと寄って！」っていうんだけどぎゅうぎゅうで大変だったね。
　私が学校に入っているときはちょうど戦争していた時代で、高等科の１年生のときに終戦になって、引き上げてきた人たちもいたから、本当にたくさんの人がいたね。
　終戦後は、新制中学になって、高等科の２年生の時に新制中学になったの。今と同じで３年生まであったんだよ。

※①尋常小学校
　明治維新から第二次世界大戦勃発前までの時代に存在した初等教育機関の名称。
　1886 年（明治 19 年）に公布され、尋常小学校、高等小学校の 2 段階となる。その後、修業年限、名称の変更等を経て、1947 年（昭和 22 年）に学制制度（六・三制の実施）により現在の小学校、中学校に改組された。

― 兄弟の話

私の弟は倶知安の自動車学校の先生だったんだよね。名前は、殿川弥太郎ね。

私より少し下の人たちは免許取りに行くとき習ったんじゃないかな。

背が高くって、根はやさしい人、あのころだから厳しく教えてたんじゃないかな。

― 看護師を志して

高等科を卒業して、しばらくは実家で農業の手伝いや、戦争から引き揚げてきた人たちへのご飯支度を手伝っていたんだけど、おばあさんがいて、寺子屋なんかもやっている教育者なひとで、そのひとに「あんた、うちにいてもしょうがないから、親戚のおじさんが北大の医学部を出て利尻に行っているからそこに行って※看護婦②になりなさい」と言ってくれて、試験を受けたの。それで利尻の病院に行ったんですよね。

他にも銀山（仁木町）から 2 人、倶知安からもいたね。

家から離れて暮らしてみたかったし、看護婦の資格をもとれるからラッキーって思って二つ返事で勇んで行ったんだよね。

はじめて赴任したのは利尻の鴛泊（おしどまり）病院、診療所だったかな。そこにしばらくいたんだけど、正看護婦の資格をとらないかって言われて稚内の病院に行ったの。2 年くらいかな。当時の稚内は、とても栄えていてあのあたりで一番だったね。協会病院なんかも二つか三つぐらいあったしね。
試験を受けて、お医者さんから証明もらったら正看護婦になれ

るよっていわれて研修を受けたんだけど、そのころには、実家に戻りたくってね。もう仕事がつらいとか何とかじゃないんだけど、もう利尻のほうを見たくもなかった、もう寂しかったね。兄弟 10 人もいるところで育ったしね、いっぱいいるところだから。別に利尻が悪いわけでもないんだけど、遠く離れてとんでもないところに来ているというその寂しさが勝っちゃったね。

そして、何回か試験を受けた時、看護婦の試験受からなくても、何してもいいから、もう帰りたいという気持ちがとても強くなってね。利尻の沓形（くつがた）ってところから来ていた友達と一緒に試験が終わった後一緒に、島に帰る予定だったんだけど、「私悪いけどこの小樽行きに乗って帰るから。」って言ってそのままうちに帰ってしまったんだよね。

なんとか実家帰ってきたんだけど、ついたときには家族にとても怒られてね。そうやって辛抱できないんだったら実家の農家手伝いなさいって言われてそれから農家の仕事をしていたね。

その時は、戦争から引き揚げた人も入れて 20 人以上の家族だったね。

そして農家の仕事をしていたんだけど、2 年くらいたったらやっぱり違うところに行ってみたくなってね。一応看護婦の資格登録してくれているからどこかで仕事できるんじゃないかって思っていたの。

でもね、その前に洋裁の資格取ろうと思って、洋裁学校に行ったんですよ。

師範くらいまでいって、もう何でも縫えるようになったね。

でも、もうそろそろもうこれも一旦おしまいにして、また病院に勤務したいって思ったの。そう思って病院を探していたら、小樽の病院が募集してて、そこの病院を受けに行ったら一発でパスして入れてくれて、それからまた病院での看護婦生活が始

ったんだよね。それから 16 年くらい、勤務していましたね。

小樽には 2 年くらいいて、それから倶知安にもどってきました。やっぱり倶知安に帰ってきたくてね、倶知安に帰ってきて※石田病院（現佐藤病院）③って総合病院があるんです。その石田病院に 10 年くらいいたかな。

看護師時代（写真左）

そのときで 28 歳くらいになっていたかな。

そのころに自動車の運転免許取ったんですよ。

そして、そのころの病院の女医さんのドライバー兼看護婦をやっていたんだよ。結核が流行っていた時で、※ストレプトマイシン④というのを接種するのに一緒についていっていましたよ。

はじめは、スクーターで回っていたんだけど冬になるとスクーターが使えないからって巡回するのが大変だっていうことで

八雲の自動車学校まで免許を取りに行ったよ。その時免許を取りに行っていたのは、女は私一人だったね。
　運転免許取った後も一生懸命働いたね。そうしたら働く看護婦さんってみんな言ってくれて。病院の人たちも喜んでくれて、「えいちゃん、えいちゃん」と大事にしてくれたし、本当は看護婦としてはしなくてよかったんだけど、炊事のほうもやっていたから「おばあちゃん配膳するよ」と言ったら「あらら、助かるよ」と言ってくれたね。
　私は、手伝えることは何でもやってみたくなるんだね。そして、やっていたおかげでちょっと株が上がったんです。

※②看護婦
　厚生労働省の免許を受けて、傷病者や褥婦（妊産婦）の看護や診療の補助を行うひと。女性は「看護婦」、男性は「看護士」と呼ばれていたが、2001 年（平成 13 年）の法改正を受けて「看護師」に統一された。
　本書では、改正以前の出来事であることから「看護婦」の名称で標記する。

※③石田病院
　倶知安町にあった総合病院。現在のさとう内科医院

※④ストレプトマイシン
　抗生物質のひとつであり、結核の治療に用いられた最初の抗生物質である。略して「ストマイ」と呼ばれる。

石田病院時代（写真右）

一　喜茂別に嫁いで

そのころになると、このあたりもだいぶ賑やかになってきて、倶知安にもダンスホールなんかができてダンスをしたくて喜茂別から何人か踊りに来るんですね。みんな遊びに行っていたね。

そうしたら、その中の一人にのちの旦那になる、荻野博道がいたんですよ。初めて会ったとき、とっても陽気な人で、私の実家がとても厳しかったから、こんな人もいるんだってびっくりしたね。

そのあと縁があって、看護婦をやめて、荻野さんのところに

嫁に行くことになったんだよね。昭和 38 年の時だったね。

当時は、※荻野商店⑤っていうのがあって、米とか雑穀、そしてイモやアスパラもやっていたね。

嫁に来た次の日からもう「はい、ママどこどこ、何だかといううちに米の配達をしてくれ」と言われて、それから米の配達を 2 軒ぐらいして。ここは嫁さん気取りできるわけにもいかないし、戸惑いはあったけれども、もともと農家の出だから、働くことが嫌いではなかったから自然と働いていたね。ドライバーとして運転、それから米の配達、倶知安まで※でめんさん⑥の送り迎えね。でめんさんもたくさんいて、大体 30 人ぐらいいたよね。みんな私の運転で、農家へ送り届けるのさ。

嫁に来ていきなり配達とか頼まれたから、このときは、免許を取っておいてよかったなって思ったね。

喜茂別に嫁いで、トラックの運転手なんかをしながらいたんだけど、嫁いだころは荻野商店がとても忙しかったし、姑さんがとても厳しい人だったね。

でも、一日中外で仕事していたから、あんまり話す機会もなくって、周りからは「ママ大変だね」って言われたけど、あんまり気にならなかったね。

舅さん（荻野　嬉　氏）は婿養子で荻野さんになった人で、とにかく一生懸命働いていたね。嬉さんは町議会議員もやっていて、当時の喜茂別の顔役だったけど、自動車の免許持ってなかったから、用事があって外出するときは、いつも私に「ママ、〇〇に行くんだけど、時間どうだい」って言ってきたね。私に気を使ってくれていたのかとても優しかったよ。

仕事のやりがいもあるしね、やっぱりその息抜きもできるの。運転の合間に、1 人でぽーっとあれする時、そういうのがやっ

ぱりね、ああ、私にはこうやって車が乗れるからほっとこういうふうに息抜きできるんだなって。
　あのころは、女の人は、結婚したら家にいて家事やったり農家の手伝いしたりするのが多かったけど、私は、看護婦もやったし、車も運転できたから、外で働くのがあたりまえみたいになっていたね。当時は不良のお嫁さんだったのかな。
　今なら携帯はあるから、便利なんだけどどこにいるって解っちゃうしね。外で仕事していたら、わからないから、それはそれで気楽だったね。
　どんなにつらい仕事でも車に乗って外で仕事していたら気分転換にもなったし、夜更かしして朝遅くなっても 5 時になったらもう倶知安に行かなかったら女工さんたちに迷惑かかるし、仕事にならないから我慢してやっぱりやらなきゃならないと思うからやってきたし、そういうのが一つの私に根性付ける、一つのものであっただろうなとやっぱり思うよ。

　体が丈夫だったのか、体調を崩すこともほとんどなくって、赤ちゃんおなかにいたときもつわりとかもひどくなかったね。
　つわりかなって思ったときは、ワンカップ飲んで乗り切ったね。今じゃ考えられないけどね。おなか大きくなっても車大きいからぎりぎりまで運転手やって、産むときも帝王切開で生んだから、一週間後には仕事していたね。
　一週間休んだ分の仕事は溜まっているから、それはそれは一所懸命にやったよ。

長女志津子さん（３歳）

―　荻野商店について

荻野商店は、さっきも言ったけど農家さんと契約して農作物を卸してもらっていたから、農協やほかの同じ仕事する店との関係づくりっていうのもあったね。菊地商店や鈴川の朝野さんなんかも付き合いがあったね。

仕事ではライバルだけど、同業者って考えて仲良くつきあっていたね。農協でだったら肥料や農薬なんかを売っていいたからそれぞれ役割があったんだよ。

そして、たまには農協の担当の人との飲んだりもしていたね。人と人との付き合いだから、人間関係は大事にしていたね。

※⑤荻野商店

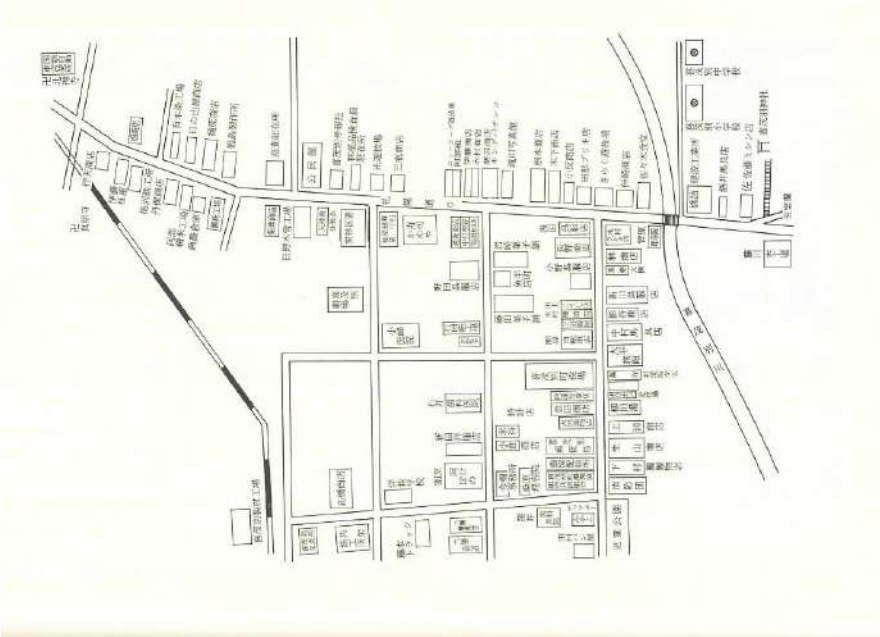
大正末期に鈴川周辺にて創業した。米穀、雑貨、味噌、醤油、肥料、荒物、和洋酒金物、陶器、農具、馬具、和洋小間物、化粧品、塩、煙草、除虫菊などのほか、大正生命保険株式会社代理店も兼ねており、多種多様な商品を取り扱っていた。

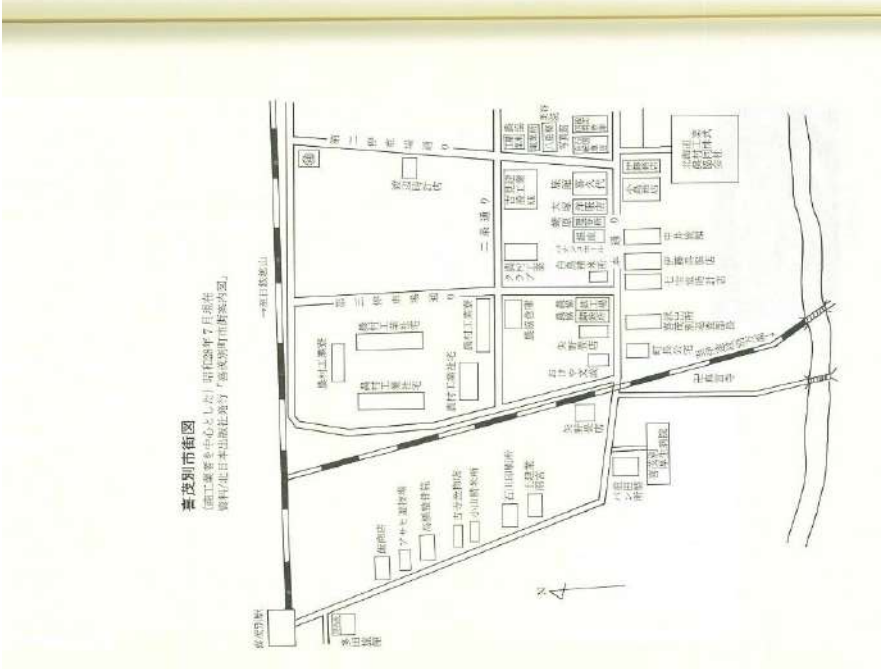
のちに昭和20年代に市街地に店舗を移転し経営していたが、平成2年に閉店。

荻野商店（大正15年ころ）

※⑥でめんさん

北海道の方言で日雇いの意味。主に農業の繁忙期などにアルバイトとして雇用された人たちを指す。





市街地図（昭和 28 年ころ）

―　嫁いだころの喜茂別の車事情

昭和 38 年に喜茂別に嫁いできたころは、あまり車は走っていなくて、持っている人も少なかったね。

仕事で必要なところが持っているって感じで多いところでは 10 台位、役場にも 1 台とかしかなかったんじゃないかな。町長さんとかの運転手も免許持っている人に委託して運転してもらっていたね。あとは、自転車かバイク、そのほかは歩いて外回りしていたんじゃないかね。

女の人で免許取った 1 号は、双葉の松田良子さん。松田博幸さんのお母さんだね。松田さんは、バスの運転手やったり、山に行って大きな丸太積んで運んだりしていてね。私は第 2 号くらいかな。今でこそ女の人も普通に運転免許とって運転しているけど、あのころは女の人で自動車免許持っている人は珍しかったんだね。

―　トラックドライバーで大活躍

荻野さんに嫁いだ後は、運転免許を持っていたのを生かして荻野商店で集荷した農産物なんかを札幌までトラックに載せて運んでいたんだよ。

そのころの※中山峠⑦は、まだ旧道で、舗装なんかされていなくって、道幅もとても狭かったから車どうしが交差するところがなくてね。峠の途中には、待避所もあったんだけど、そこまで行かないと交差できないんです。バスも上がってくるだろうしね。そういう時代でしたね、昭和 30、40 年ころだね、昭和 44 年に今の中山峠の道路が開通しましたけどね。

その時にね、いやあ、こんな険しい道を通らないと札幌に行けないのかなって思いましたけど、やっぱり札幌に行く道路がそれしかないから、荷物を届けるために頑張って運転したんだよ。

荷物の中には、そのころ委託で種苗会社の種をつくっていたんですよ。そうしたらそれをトラックに積んで、そして札幌の会社まで持って行くんですけど、大変ながらもやりがいがあって、私は嬉しかったんですよ。

だから、「私、行く」と言って進んで引き受けていましたね。やっぱり免許取ってよかったなって思いましたよ。

札幌に配達をしていたほかに、当時の※日産ジュニア⑧だったかな。ジュニアに幌を掛けて、朝 5 時に家を出発して倶知安まで、でめんさんを迎えに行くんだわ。今みたいに道路がよくなかった時代だったから時間も結構かかったよ。

でめんさんたちは、倶知安の旅家米屋さんのところで待っていてくれて、到着したら「はーい、来たよー！」って言って乗ってもらうんですよ。そのときは、多くて 8 人くらいの人を乗せていたね。今なら車に乗れる定員とか決まっているからそんなに人を乗せられなかっただろし、幌かけていたから外から見えなかったからね。とにかく働いてくれる人をたくさん乗せて喜茂別の畑へ送り届けていたよ。

雨の日なんかは、道路も水たまりができて舗装されてないからすごく滑るんだわ。でも勢いつけてグーッと行って、滑ったらまた戻ってもっと勢いつけて通っていたね。難関を突破しているって感じだったよ。思い出のある畑はいっぱいあるね。

そのあと、集荷した作物を選別するんだけども、そのころの荻野商店は倉庫もあちこちにたくさんあって、とても広かったね。

それで、春はアスパラ、夏から冬はジャガイモとかユリ根。季節、季節の農産物を各地の倉庫に集荷して選別して出荷していたんだわ。冬も倉庫にみんな入れるの。そして※女工⑨さん方がみんな選別して貨車に積むの、貨車積み。

そうしたら、貨車に入ったらね、もうしばれていったら困るから、今度のりで貨車を密閉して、それにこう入れてやらなきゃならないから、そして女工さん方が選別したやつを今度はトラックで運んで、4 トン車でガーッと運んできて積むの。

豆は種用の豆で、倉庫の 2 階で選別をして、傷んだものや、腐ったものが入っていたら大変だからそんなのを全部取り除くんだわ。コンベアみたいなので 2 階から降ろしてきてトラックに積めるようにしておくのさ。1 回に 8 俵とか、多い日なら 10 俵とかって作っておいてくれるの。それを札幌に出荷するもんだから夜のうちにもうちゃんと車に積んでちゃんと準備しておくの。

選別する女工さんたちは、当時の私と同じくらいの年齢かな。みんなバンバン働いていて、選別なんて速いよ、もうタッタッタッタッタッタッって、あら、ちゃんと見てやっているのかなと思うぐらい。

でもちゃんと選別されていて、すごいなと思いながら見ていたよ。ジャガイモにしても、花豆にしてもまあ速かったね。

豆の季節は秋の終わりころだから、出荷する時期の朝は峠が吹雪じゃなきゃいいなっていつも思っていたね。

旧道のときは、喜茂別から札幌まで大体 2 時間半くらいかかっていたね。途中で車どうしが行き会ったら交差できないからどっちが譲るかでにらめっこだったよ。一応登り優先ってことで下っているほうは待避場までさがって譲ることになっていたね。そして譲ったときは、お互いクラクション鳴らしてあいさ

つしていくの。

喜茂別の女性ドライバーの先駆け

普通の自動車でもぎりぎりだったんだからトラックどうしのときは大変だったね。

喜茂別の他のトラックなんて、うまくすれ違えなくて道の周りに生えている木に引っかかってたくさん積んでいたアスパラ全部こぼしちゃったりしたんだよ。

そして、まだそのころは、馬車で通っていた人もいたから、合図のために鳴らした車のクラクションでびっくりした馬が馬車ごと谷に落ちちゃったりして、助けたくても助けられなかったりしたんだよ。しばらくの間、馬の事故があった場所には、木でできた看板が立ててあって、今でいう事故現場みたいなの

があったね。

自転車にモータつけたようなバイクなんかも走っていたけど、自動車の排気ガスやら泥やらで真っ黒になっていて、途中定山渓の温泉があるから入ってきれいにするんだけど、喜茂別つくころにはまた真っ黒なんてこともあったみたいだね。

冬は当然通行止めだったから札幌に行くときは雪の少なかった小樽周りで行ったんだよ。でも、倶知安峠や稲穂峠なんかも旧道だったし、除雪も※ワイヤー式のブル⑩から今みたいに道もきれいにならなくてとにかく時間かかってね。1 日がかりで出荷しいていたよ。

冬になったら今度は、イモがしばれないようにトラックに石油ストーブを 2 つぐらい入れておいて、そして密閉して中をあっためるのさ。

危なくないように見ながらやって、あったまったら今度ストーブを下して、そしてまた積んでいたんだよ。

出荷されるのがジャガイモだったら「しばれないで行けよ！」って話しかけたりしていたね。

旧道のときは、今みたいに車もスピード出せたわけじゃないから、大きな衝突事故になったりはしなかったけどね。

新しい中山峠の道路は昭和 44 年に全面開通になったね。だから、それまではずっと旧道を通っていたんだよ。結婚してからだから、6 年くらい通っていたんだね。

でも、札幌に行けるって思っていたから大変だったけど嬉しかったね。札幌にはうちの姉たちがいて、出荷した後に少し時間があったりすると会いに行っておしゃべりとかして喜茂別に帰ってくるの。姉は私が帰るときに「あんたなら、すこしもゆっくりすることないんだね。」って言っていたけど、そういう性分だったんだね。

最盛期は、朝夕のでめんさんの送り迎えと、昼間札幌への出荷で一日中車を運転していたね。

まぁそんな感じだから、一年中休みなんてなかったね。

でも、みんな働き者だったから、私も一役ちゃんとやらないとって思って、運転の仕事をしていましたね。

※花豆⑪や※ユリ根⑫は東京や大阪の市場へ出荷していました。今でも高級食材だけど花豆やユリ根は、当時も大きい街では高く取引されていたからね。

最初は花豆だけだったんだけど、ユリ根が高く買ってくれるって聞いて、喜茂別でもユリ根を作ることになったんです。

おじいちゃんが栽培方法聞いて、町内の作ってくれる畑をみんな回って歩いてね、そしてやり方を教えていたんだよね。ちょっと砂地の傾斜地がユリ根の栽培に向いていて、喜茂別も、相川や尻別、それから共栄のほうで作っていて、かなりの量を収穫していましたよ。

今でこそユリ根って言ったら真狩が有名だけど、喜茂別が一番先にユリ根を作っていたんだよ。

でも、ジャガイモとかと違って、一年で収穫できないし、できたユリ根は機械で収穫できないから一つ一つ手で収穫して、箱詰めも丁寧にしなきゃいけなくて手間暇かかるから少しずつ作らなくなっていってね。

※⑦中山峠

札幌市南区と喜茂別町の境にある峠。1871 年（明治 4 年）本願寺街道開削により開通した。改修工事もされたが、旧道と呼ばれる初期の道路は、道幅も狭く、カーブも多い勾配のきつい道路であったため、戦後自動車の交通量が増加すると転落事故が相次ぎ「魔の山道」と呼ばれた。1957 年（昭和 32 年）から

国道 230 号線を含む全面改修工事が始まり、1969 年（昭和 44 年）に現在の新道が開通した。

中山峠旧道の様子

※⑧日産ジュニア

日産自動車が 1956 年（昭和 31 年）から販売製造していたピックアップトラック。1983 年（昭和 58 年）に生産終了。

※⑨女工さん

第 2 次世界大戦前後、雇われで作業場や工場で働いた女性に対する呼称。

※⑩ワイヤー式ブルドーザー

1950 年代ころのブルドーザーはウィンチによるワイヤーの巻き上げでアーム、バケットを動かし、荷物のつり上げや掘削を行う仕組みが主流となっていた。1970 年代以降油圧シリンダーによるブルドーザーが主流となっている。なお、現在も長いアームのものは、ワイヤー式のものを使用している。

※⑪花豆

ベニバナインゲンメキシコ高原原産のインゲンマメ属の多年草。　日本では熟した豆を煮豆や甘納豆、餡の原料とすることが多い。

※⑫ユリ根

食用のユリの球根（鱗茎）であり、ユリの葉が変形した鱗茎に養分が貯蔵され、栄養豊富となり漢方薬としても用いられる。

高級食材であり、主に茶碗蒸しなどに用いる。

―　ご主人（荻野　博道氏）

パパは、あんまりうちの仕事している人じゃなかったね。友達も多くて夜になるとみんなで飲みに出かけていたよ。

そしてパパが飲んで帰ってきたら、2 階行ってほっと寝たりなんかして、おばあちゃん一生懸命「博道ならどうもならない」とか言っているけど、まあ自分の息子ば怒るんだから、もうそれはそれでそっとしておいてやっていいわって。そんな感じだったね。

でも、やっぱり、ほれもう病院勤務もしていたし、他の人と

ご飯を食べて、みんなとこうやって一緒にやっていたということがね、やっぱりこれはもう一番の救いだったなと、自分でもう観念して、割り切ってやっていたよ。

パパが出掛けると、農家さんところでみんなしてワンカップ飲んでいるんだわ。あのころは、まだ、馬を飼っている人も多くって、馬に豆とか積んで出荷した後に誰かの家に集まって一杯やるんだよ。その時馬は、電信柱につながれていたけれども、利口な馬なんかは勝手に自分のうちに帰ってしまうのもいたよ。電信柱につながれていた馬も、酔っ払い乗せてちゃんと家まで帰ってねってお尻叩くとちゃんと家まで帰ってくれるんだよね。うまくできているわ。

そんななか、パパを私が迎えに行くと「ママも一緒に飲もうよ」って誘われたけど、運転手で送り迎えしなきゃならないし、一緒に飲んじゃったら仕事しないお嫁さんって思われるかもしれないから。

でも、今考えると、パパはセールスマンだったのかなって思うよ。だって、荻野商店は、農家さんから作物を集荷して商売しているわけだから、顔つなぎしていたんじゃないかってね。飲み仲間が、仕事仲間になって商売になっていたんだろうなって思うよ。一緒に飲んでいる人たちも、仕事になれば一生懸命働いていたし、いい関係だったんだね。

だから、パパが営業、私が運送とかって役割分担ができていたんだね。今でいう「ビジネスパートナー」だ！

荻野博道氏喜寿のお祝い

― トラック運転手の引退

しばらくトラックの運転手やって、最後は 4 トントラックに乗って※岩内の日本アスパラ⑬に配達していたね。まだ倶知安峠なんかはバラス道でカーブもきつかったから走りづらくってね、ゆっくりゆっくりと通っていたよ。4 トントラックって言っても今みたいにパワステついてないからハンドルも重くって、よく運転していたなって自分に感心するよね。

そのうち、トラック専門の運転手が来るようになって、(オオタキさんやサトウのマッコとかが) 4 トントラックはあまり運転しなくなったね。

でも、日本アスパラ行ったときは、集荷場にトラックを横付けするんだけど、私は一発でできるから褒められてね。嬉しくなって、ほかの運転手と一緒について行って難しいところを運転していたよ。

免許取りに行った時から縦列駐車とか上手で、自動車学校の先生にも褒められたよ。試験の本番でもとっても緊張したけど、度胸決めてエイッとやったら一発でぴったりできたの。

うまくいったかっら、「いやあ、こんなものぐらい目つぶっていてもやれるわ」とかって言ってね。

トラックは運転しなくなったけど、女工さんの送り迎えはずっとやっていたよ。荻野商店が昭和 60 年くらいにやめたから、それまでは運転手だったよ。歳は 60 くらいになっていたんでないか。

※⑬日本アスパラガス株式会社

1922 年（大正 11 年）日本で初めてアスパラガスの栽培・生産に成功した、下田喜久三が設立した企業である。本社は岩内町にありホワイトアスパラガスの缶詰を製造。製品はアメリカにも輸出していた。1996 年（平成 8 年）で農産物加工から撤退しているが、会社名はそのままとなっている。

一　交通安全指導員として地域に貢献

中山峠の旧道で交通事故や熊に襲われて亡くなった人や、新道の建設、新道での交通事故で亡くなった人がたくさんいます。

実現はしなかったけど、中山峠に交通事故で亡くなった人を供養する碑を建てようっていう話が出ていました。

自分も、旧道のころからトラックで何度も通っていて、いろんな事故を見てきたけど、中には助けたくてもどうしようもない事故とかもあって、何か自分でできることはないかなって思っていたんだよね。

私こんなことをこうやって忘れもしないでいつも思っているのが自分で不思議なくらいだったけど、もう供養のしようもないし、もう下へ落ちて転がったやつをあんた、全然助けていないというんだから、これはもうどうしようもないなというのがもう、このままになっちゃうんだなと。

喜茂別に嫁いできたとき、運転免許を持っていることがきっかけになって、町内の人たちに※交通安全指導員⑭になってくれということになってね。

商工会婦人部の旅行でいろんなところに行くと、交通安全を願った地蔵さんがあるんだよね。これを喜茂別にも作りたいと思っていたりしたね。ずっと交通安全のことが頭から離れなかったんだね。

喜茂別で運転手していたころから交通安全指導員やっていて、その時は女の人は私くらいしかいなくって、そのあと昭和 40 年くらいにその当時商工婦人部にいた今川澄子さんと蘭越や道の研修会に行ったとき、交通安全の会を作ってほしいって頼まれて、「こぐまクラブ」を立ち上げたの。

そのときに交通安全音頭のレコードをもらってきて、保育所の広場で運動会とかの行事に曲を流してみんなで踊ったのがはじまりだね。踊ってくれた人には、アクリルの人形を作って配ったの。1 回に 200 個ずつとか作って、交通安全のシールもつけて毎年あげていたね。

こぐまクラブ、保育所って活動を広げていって、交通安全パ

レードとかもやったね。パレードは、中山峠の新道できる前だったから、交通量は今よりは少なかったから 230 号線でやったんだよね。

新道ができてからは、市街地の町道を交通安全音頭踊りながらまわったね。そのあとは大町のちびっこ広場でやったんだよ。

交通安全音頭は、最初保育所や小学生の子どもたちに向けてやっていたんだけど、大人もおじいちゃんもおばあちゃんもみんなで踊ろうっていって、いろんな人に呼び掛けてやったね。

景品の人形もいろんな人に見てもらって「ママ、こういうのすごくいいね！」って褒めてもらったの。褒めてもらったら、また頑張ろうってなるよね。

一番大きくやったのは、お祭り開いたことだね。最初は、駅の停車場、駅がなくなってからは、大町ちびっこ広場で開催したね。

そういえば、ちびっこ広場って子どもたちがつけた名前なんだよね？最初は空地だったから子どもたちが集まっていくなかでつけられた名前だって聞いたね。そのあと、役場のほうで整備して今みたいな公園になっていったんだね。

それこそ夏祭りも昔は駅前通りでやっていたよね。それが、ちびっこ広場になったんだよね。

※⑭交通安全指導員

学校や保育所、幼稚園など、園児・児童に足して交通安全教育を行ったり、交通指導を行う職員である。

都道府県または市町村からの委嘱を受ける非常勤の特別地方公務員である。

交通事故絶滅を願って 商工婦人部が愛の鈴プレゼント

町商工会婦人部長の妻谷政枝さん、副部長の根本トミ子さん、交通指導員の荻野栄子さんが、入学式の当日、喜茂別小学校を訪れ桧森校長に、今年入学した児童六〇人全員に、交通安全を祈願した愛の鈴を寄贈されました。

この鈴は児童たちが登校、下校の際の交通事故絶滅を願って、会員百十五人が手作りされた真心のこもったかわいい贈物でした。

この会員の方々の奉仕活動は、今年で二年目を迎えましたが、喜茂別小学校では「交通事故が年毎に増加している今日、学校といたしましても誠にありがたいことで心より感謝を申し上げます。

学校といたしましても、これを機に心を新たにして、交通事故の絶滅を期して指導に当たる覚悟でおりますので、商工会関係の方々や町民のみなさんにおかれましても、今後ともよろしくご協力くださいますようお願い申し上げます

（愛の鈴プレゼントを受ける桧森校長）

町広報より（昭和 56 年）

一　安全地帯開店

荻野商店がなくなって、そのあと、イモの倉庫だったところ内装だけ直して、「安全地帯」をはじめたの。

もともと倉庫だったからブロック造りで中には 150 人くらいは入れる広さだったよ。イモの代わりに人が入れるようにしたって感じだね。

あのころは、商売やることに抵抗なくて、とにかくやってみようって思って始めたの。テーブルや棚置いて、昼間は違う仕事して、夜になったらオープンするの。最初はチャーム程度で、人が入ってお酒を飲んでくれればいいかなって始めたんだけど、そのうち鍋なんかも出すようになって。ウエートレスで 3 人くらいつけてね。とっても好評だったんだよ。みんなまじめに働いてくれて、話も面白いから店番頼んだりしてね。

もともと交通安全指導員もやっていたし、娘が歌手の安全地帯好きでね。それなら名前は「安全地帯」で行こう！ってきめちゃったの。

安全地帯のカウンターにて

― 趣味の民謡・舞踊

民謡は、若い時から始めていて、ずっと唄っていたね。喜茂別の※民謡同好会⑮にも入って、いろんなところで唄わせてもらったね。

そして、商工婦人部のなかで舞踊のあやめ会を設立したの。私が創始者のひとりなんだよ。

振り付けは、当時あった井上金物店の奥さんで、名取の踊り手さんだったからお願いしたの。会の名前はわたしがあやめが好きで響きもよかったからそのまま「※あやめ会⑯」って決め

ちゃったの。

それから 20 年くらい会長させてもらって、※文化団体⑰でも役員やって表彰もされたんだよ。

ボランティアとして、「※しらかば会⑱」にも所属して、高齢者への弁当作りとかもやっていたね。

慰問活動の様子

※⑮喜茂別民謡同好会

昭和 45 年に、「郷土の追分節を中心に、全国民謡の全般にわたり、歌唱及び曲詞を研究、その健全なる普及と、伴奏技術の向上を図る」ことを目的として発足した。

町内はもとより、山麓、後志などの行事にも積極的に参加し、全道大会入賞者を輩出するなど、本町の芸能文化の振興・発展

に寄与した。
　現在は会員数減少により休会している。
※⑯あやめ会
　昭和 56 年に喜茂別町商工会婦人部員の踊り同好の者が集まり、「舞踊サークルあやめ会」を発足した。習得した舞踊の公演は、町内の各種行事にとどまらず、昭和 60 年ころには、クラウンレコード舞踊まつりへの参加など多岐にわたる。
　また、平成 2 年に発足した、「後志舞踊の会」にも参画し、舞踊を通じた芸能文化の振興・発展に寄与している。
　現在会員 6 名（会長　山本　玲子氏）

※⑰喜茂別町文化団体協議会
　昭和 45 年にそれまで、独自の活動をしていた文化単位集団の賛同を得て発足。
　発足時は、民謡同好会をはじめ、16 団体が所属し、延べ 200 名の会員が在籍した。
　現在（平成 29 年 4 月現在）の所属団体数は 10 団体、会員約 100 名、会長は吉見　啓一氏

※⑱しらかば会
　昭和 45 年発足。町内の独居老人等へ毎月 1 回食事の提供する福祉活動を行ったり、町の行事等でおいしい豚汁などを提供している。

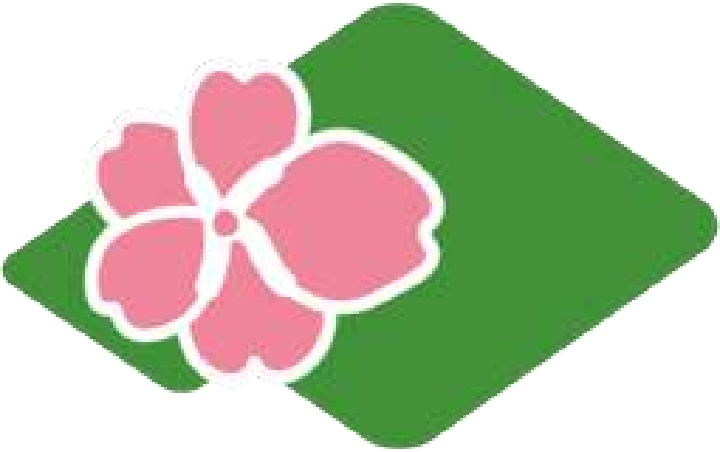
多彩な芸で大活躍

○発刊に添えて

荻野榮子様におかれましては、今年度開催の町文化祭におきまして、長年にわたる芸術・文化活動の功績を称え、喜茂別町の芸術・文化の振興発展に著しく貢献した者に対して贈られる「喜茂別町文化貢献賞」を受賞されました。

表彰式の様子

○聞き書き集作成にあたり

この聞き書き集は、平成 25 年 7 月 28 日に実施されました、きもべつ歴史プロジェクトの会よる荻野榮子さんへの聞き取り資料を基に作成いたしました。

きもべつ歴史プロジェクトの会の方々には、資料提供等のご協力をいただいたことに深く感謝申し上げます。